

(公表：2025/08/25)

核兵器の矛盾と日本の核武装

(終戦 80 周年記念 Abema 討論会)

今年は終戦 80 周年であると同時に、広島・長崎原爆投下 80 周年でもあり、例年以上に核問題に関心が集まっています。とくに 7 月の参議院選挙に立候補し当選した参政党の新人政治家「さや」(本名・塩入清香)氏が、「日本は核武装せよ、核兵器は安上がりだから」という趣旨の発言をして物議をかもしたことがきっかけとなって、「日本核武装論」が論壇やメディアで盛り上がっています。惴りながら、小生も、昔核や原子力問題に関わった元外交官として、あちこちから発言を求められています。

以下の討論番組は 2025 年 8 月 22 日午後 9 時から約 40 分にわたって、インターネット放送局 Abema Prime (テレビ朝日系) で行われたもので、小生は、国際ジャーナリストの古森義久氏(元毎日新聞記者)等とともに出席し、議論してきました。戦後生まれの若い世代の人々との率直な意見交換は、小生にとっても大変良い経験になりました。比較的短時間で発言時間が限られていたので、言いたいことの 10 分の 1 も言えませんでした。この複雑でデリケートな問題をタブーなしで、自由に論ずることができたのは、それなりに有意義だったと思っています。

当夜リアルタイムでご覧になったにもおられるかと思いますが、まだご覧になっていない方は、下記の URL でいつでも自由に視聴できますので、是非ご覧ください。その上で、何らコメントなり、ご感想をお聞かせいただければ幸いです。さらにこの番組を知人やお知り合いにも広く拡散していただければ幸甚です。

https://www.youtube.com/watch?v=pK_ycMCBAfg

#アベプラ① “戦時を生きた者” と核武装&平和を議論／ABEMA

なお、この番組に対しては放映直後からかなり大きな反響があり、現在約 400 件のコメントが寄せられています。これらのコメントは玉石混交ですが、中には、建設的で納得できるコメントがいくつかあると思います。同じ URL で併せてじっくりご覧下さい。

ちなみに、核問題に関する小生の意見は、以下の通り、拙著のほか、いくつかのメディアで

公表されており、その多くはこのホームページ上にも載せてありますので、関心のある方はお暇な折に是非ご一読ください。

◆拙著「日本の核 アジアの核 ～日本人の核音痴を衝く」(1997年、朝日新聞社刊)

◆「核廃絶」と「核抑止」は矛盾せず 日本は堂々と世界に主張せよ

金子熊夫 (外交評論家・元外交官) 2023年8月15日 Wedge Online

<https://wedge.ismedia.jp/articles/-/31104>

【追伸】

上記の Abema 討論会の模様は、次の記事でも簡単に紹介されています。ご参考まで。

~~~~~

## 戦時を生きた 80 代と核武装論…今後は「タブー視しないことが大事」「『安 いから持っていい』『持たなきゃ他国になめられる』議論はすべきでない」

2025/08/24(日) 9:30      ABEMA TIMES

### 戦時を生きた 80 代と核武装論

核政策をめぐる、日本の姿勢が注目されるなか、いわゆる「核武装安上がり論」に加えて、核に対する日本の矛盾も議論されている。日本は今、アメリカの拡大抑止、いわゆる「核の傘」に守られている。しかしその一方、NPT（核兵器の不拡散に関する条約）の枠内で、核兵器廃絶に向けた取り組みを進めていることに対し、行動が矛盾していると指摘されているのだ。

石破茂総理は、アメリカの核抑止に頼ることと、核兵器廃絶の両立に矛盾はないとしているが、X では「核の傘に守られながら核廃絶を訴えるのは詭弁」「被爆国日本は、核廃絶に全振りすべき」「石破さん、核共有論者じゃなかった？」といった指摘も。そこで『ABEMA Prime』では、戦争を生き抜いた 80 代の専門家 2 人と、核武装の是非を議論した。

### ■核武装論のタブー視

## ＜写真＞古森義久氏

ジャーナリストの古森義久氏（84）は、日本の核武装は選択肢の一つと考えている。「日本では核武装論がタブー視され、少し言っただけで軍国主義者の危険人物として扱われてきた。しかし、日本の防衛が一番大事なら、そのためのあらゆる手段を考えていい」。

そして、「核兵器は、実際に使うよりも、『使うぞ』と脅すことがプラスになる。インドとパキстанは、両方が核兵器を持っているため、『互いに使わない』と抑止できている。国会議員が『核武装もあり得る』と自由に言えるようになったのは、日本の防衛にとって前向きな展開だ」と評価した。

## ＜写真＞金子熊夫氏

元外交官の金子熊夫氏（88）は、日本は核武装せずに現状を維持していくべきだと考える。NPTについては「脱退できる。将来国家の最高の利益が損なわれた時には、条約の規定に従って脱退する権利があると明言されている」と説明する。

NPTに関する国際交渉に関わった経験から、加盟は「正しいと思ったから決断した。必然だった」と振り返る。「NPT 加盟が議論されている頃に、佐藤栄作総理が“非核三原則”で核の軍事利用を放棄してしまった。そのため、平和利用が担保されれば、NPT に入らない理由はなくなった」。

## ■ 『『安いから持ってい』『持たなきゃ他国になめられる』議論はすべきでない』

日本人が今後、核をめぐる議論をする上で、必要なポイントは何か。金子氏は「タブー視しないことが大事だ。『核問題を議論しない』を含めた“非核四原則”はおかしく、自由に議論すべき。しかしながら、戦後の日本外交を点検すると、核問題は非常にセンシティブだ。現在の日本政府の政策は、現実的にこれ以外ないと考えている。80 年間の血が出る思いを考えると、『安いから持ってい』『持たなきゃ他国になめられる』といった議論はすべきでない」と語る。

古森氏は「安倍晋三元総理から『日本の政治家にとって、核武装論をぶち上げるのは自殺行為だ』と直接聞いた」と振り返る。「それほどマスコミや識者、世論の反発が激しい異常事態だ。核武装論は、日本の安全保障政策における立派な選択肢のひとつ。しかし、それを言うとは“悪人”のレッテルを貼られる。その背景には、反米思想や社会主義志向があったと考える」。

■「戦前生まれの人がいるからタブーになるのでは…」

### ＜写真＞ヤマトパンクス

バンド「PK shampoo」ボーカルのヤマトパンクスは、核武装論のタブー視について、「戦前生まれの人がいる状態で、そういう話をするのは気まずいため、タブーになるのではないか。『80 歳を超える方がご健在の中で、核やミサイルの話をするのはどうだろう』という部分もある」との見方を示す。

他にも「広島の人の前で」といった要素を例に出し、「重層的なレイヤーが、複雑に折り重なっている。コストや国際情勢を議論するには、もう少し時間が必要なのではないかと、なんとなく直感で思った」と話した。

(『ABEMA Prime』より)